

「目的」都市居住高齢者にとって望ましい生活環境を整備するにはどのような要件が必要なのかという問題意識に基づき、物理的環境・社会的環境と高齢者の生活との相互関係を探る研究をおこなってきた（本報告1-3報）。第4報では、都市高齢者の居住形態の変化から、将来更に重要性が増すと思われる小規模世帯住宅、なかでも高齢者集合住宅に住む高齢者の生活に焦点をあてる。生活実態、地域への参加、地域に対する認識、社会関係の分析を通じて、高齢者集合住宅を生活環境とする人達の生活の特徴と問題点を探る。

「方法」第1次調査：都内3地域（世田谷区、台東区、東久留米市・清瀬市）の在宅高齢者、および高齢者集合住宅居住者への面接聴取調査。調査完了数：995名、うち高齢者集合住宅居住者132名。第2次調査：在宅14名、集合住宅5名に対する事例調査（第3報に同じ）。

「結果」(1)高齢者集合住宅はそれを取り巻く地域の安全性、利便性という機能的側面においては一定の水準を満たしている。(2)一方で地域への統合、地域参加、居住の安定性、社会関係にはいくつかの問題点がある。在宅高齢者と比較して、地域活動への参加、施設の利用、外出行動は少なく、別居子、友人、親族との時間的距離が長く、接触頻度も少ない。(3)これは居住の継続性が高齢者の社会関係に影響しており、高齢者の社会関係の維持には居住の安定性が重要であること（第1報）を示している。(4)高齢者集合住宅を生活環境としてより望ましいものにしていくには、居住の継続を最大限可能にするような配慮が必要である。